

學會彙報，奥付

雑誌名	中国文化：研究と教育：漢文学会会報
巻	38
ページ	93-94
発行年	1980-06-28
URL	http://hdl.handle.net/2241/00149323

学会彙報

○昭和五十三年度 漢文学会大会 六月二十四日(土)

於 品川文化会館

〔研究発表会〕

- 一、庚信の文学について 東京学芸大附属高 安藤 信広氏
- 一、魏晉における「慷慨」について 北海道教育大 後藤 秋正氏
- 一、盧照鄰の文字 函館大 高木 重俊氏
- 一、王充の古典意識 福島大 大久保隆郎氏
- 一、經典釈文索引編集について 月洞 譲氏
- 〔漢文教育研究会〕 同日午後二時～午後三時
- 一、「帰去来之辞」の指導をめぐって 新潟高 金子 彰男氏
- 〔総会〕 司会 高橋委員
- 一、議長選出 月洞譲氏選出
- 二、諸報告
- 三、議事

- (1) 昭和五十二年年度決算
- (2) 漢文学会の改組について
- (3) 委員選出

○同窓会暫定委員

鎌田正、牛島徳次、月洞譲、金子泰三、向島成美

○研究会暫定委員

伊藤虎丸、横山伊勢雄、高橋均、若林力、中村俊也

四、委員長挨拶

○昭和五十四年度 漢文学会大会 六月二十三日(土)

於品川文化会館

〔研究発表会〕

- 一、中国現代文学について 筑波大大学院 白井 啓介氏
- 一、張九齡の感遇詩について 筑波大附属高 加藤 敏氏
- 一、莊子郭象序の真偽問題について 京都教育大 青木 五郎氏
- 一、菅原道真の詩に及ぼせる楚辭の影響 菅野 礼行氏
- 一、「自詠」の詩を中心として 和歌山大 菅野 礼行氏
- 一、思想教材の図式化について 国立高 謡口 明氏
- 一、新学習指導要領の実施に際しての漢文教育のあり方について 市川高 上田 武氏
- 一、多様な生徒に対応するための漢文教育の一方法 豊科高 福田 芳典氏
- 一、郷土の漢文資料を用いて 加賀 栄治氏
- 一、稷下の学の一性格 横山 委員
- 〔総会〕
- 一、議長選出 千原勝美氏
- 二、諸報告 横山 委員
- 三、議事
- (1) 昭和五十三年度決算
- (2) 「東京文理科大学・東京教育大学漢文学同窓会会則案」および「大塚漢文学会会則案」の審議

四、東京教育大学漢文学会終束の宣言

五、挨拶 鎌田正氏

○大塚漢文学会彙報

委員長 加賀栄治

委員

内山知也、伊藤虎丸、横山伊勢雄、高橋均、中村嘉弘
若林力、向島成美、中村俊也、佐治俊彦、堀池信夫、
安藤信広、中山至、小谷一郎、間嶋潤一、加藤敏、阿
川修三、小松建男

日誌

七月三〇日第一回委員会（茗溪会館地下）

一〇月二七日第二回委員会、第一回編集会議（大塚・奴寿司）

十一月二四日第二回編集会議（池袋田舎家） 一月一九日第三回編

集会議（同上） 二月二三日第三回委員会（同上） 三月一六日漢

文教育座談会（茗溪会會議室） 四月一二日第四回編集会議（大塚

奴寿司） 五月二四日第四回委員会（同上）

編校後記 独白風に――

毎回委員会の場所に困る。寿司屋の二階座敷に集まってい
ると（ここなら比較的安くすむ）、事入り前の赤穂義士のよ
うな気持になってくる――そういう事態にもまして、新しく
「中国文化―研究と教育―」と名乗りつつ、同時に「漢文学
会会報通巻三十八号」と称するこの雑誌の表紙が、何よりも
端的に、我々が置かれている状況と本誌の性格とを物語って
いよう。それは、母校の移転・拡充が、実は廃止・新設でも
あったという教育大と筑波大との関係の現実を忠実に反映し
ているとも言えるだろう。

教育大の廃学と筑波問題をめぐって、前の委員会で長い苦
悩と摸索が続けられたことを私たちは知っている。全会員に
よる「同窓会」と自由参加の「研究会」とに分けるという結
論に達したのは一昨年の総会においてだった。道は三つしか
なかった。第一は筑波大漢文学会にすること。賛否の「意見」
は別にして、現実には筑波大にその可能性がないことを私たちは
知らされた。解散しないこととすれば、道は、この事態を逆に
積極的に受けとめて、旧漢文学会をうけ継ぎつつ、全国的に
開かれた、かつ権威ある学会を作っていくことにしかない。
だが果してこの学会と会報を維持出来るか。見通しは明る
くはなかったし、今もない。事務所は取敢えず筑波大の横山
研究室に引き受けてもらった。彼が在職する限りは、その労
を担ってくれるだろう。しかし旧会員四百四十余名中、現在
までに学会加入の意志を表明されたのは百二十名にすぎな
い。会費二千円、まともな雑誌を出そうと思えば、「刊行費の
三分の一もまかなえない。昨年の総会で、私は、「三年で潰
す覚悟を了承して下さいなら、編集委員長を引き受けよう」
と放言した。みじめな内容で醜を天下にさらすくらいなら、
三年で潰れてもよいではないか。事実、本号は旧漢文学会会
報の最終号であり、同時に「中国文化」創刊号でもあるわけ
だが、印刷費は、旧漢文学会から引継いだ金額を注ぎこみ、
なおすでに大幅な赤字になる。つまり、私たちは本号に、い
わば「賭けた」のである。本号を見て下さった各位が、こう
いう会報を出すことに意義を認めて会に加入し、また同窓以
外の同僚や学生にも加入を勧めて下さるか否かに、会の運命
のすべてがかかっているのである。悲壮がっているのではない。
「身を捨ててこそ……」とか。また楽しき門出ではないか
御支援を切に御願い申上げる。

（虎）

大塚漢文学会々則

- 一、本会は大塚漢文学会と称する。
- 二、本会は漢文学及び漢文教育の研究と普及とを図ることを目的とする。
- 三、本会の会員は左の通りである。
 - 1、旧東京教育大学漢文学会々員であつて参加を希望する者
 - 2、その他入会を希望する者
- 四、本会の主な事業は左の通りである。
 - 1、総会 年一回
 - 2、例会 年約三回
 - 3、学会誌及び会員名簿の発行
 - 4、その他必要な事項
- 五、本会の役員は左の通りである。
 - 1、委員長 一名
 - 2、委員 若干名
 - 3、編集委員 若干名
- 六、役員の任務
 - 1、委員長は本会を代表し委員とともに運営にあたる。
 - 2、委員は本会の庶務・会計・企画を分担する。
 - 3、編集委員は学会誌の発行にあたる。
- 七、役員の選出及び任期
 - 1、委員長は委員の互選による。
 - 2、委員は会員の互選による。
 - 3、委員会が必要に応じて委員を委嘱することができる。
- 4、任期は二年とするただし重任は差し支えない。
- 八、会員は会費年額二千円を納める。
- 九、本会々則の変更は委員会の審議を経て総会出席者の過半数の

承認を得なければならない。

附則 1、本会は昭和五十四年六月二十三日より東京教育大学漢文学会々則に代つて発効する。

2、本会の事務所を当分の間筑波大学芸言語学系中国文学研究室に置く。

編集委員(委嘱) 以上

(哲学・思想) 小林 信明・加賀 栄治・水沢 利忠

(文学・語学) 鈴木 修次・内山 知也・松本 昭・伊藤 虎丸

(漢文教育) 鎌田 正・金子 泰三・田部井文雄

学会委員会

(長) 加賀栄治(副・総務) 横山伊勢雄(文書) 安藤信広・中山

至(発送) 向島成美・中村嘉弘・加藤敏(会計) 中村俊也・間嶋潤

一・堀池信夫(企画) 高橋均・若林力(会報編集) 内山知也・伊藤

虎丸・佐治俊彦・小谷一郎・阿川修三・小松建男

漢文学会会報第三十八号 昭和五十五年六月二〇日印刷
昭和五十五年六月二八日発行

大塚漢文学会

編輯者

伊藤 虎丸
内山 知也
佐治 俊彦

印刷所

東京都千代田区神田神保町三ノ一〇
株式会社 共立社印刷所
電 (261) 二〇二八

茨城県新治郡桜村

筑波大学芸言語学系横山研究室内

発行所

大塚漢文学会